

【シンポジウム】

「杜甫の散文について考える―杜甫文学の全体像を明らかにするために―」

パネリスト：谷口 匡（京都教育大学）杜甫散文研究の意義

高橋 未来（大阪公立大学）「為華州郭使君進殘寇形勢図状」について

荒井 礼（宇都宮大学（非））文・詩題・詩序から見る杜甫散文の特徴

司 会：谷口 真由美（長野県立大学）

盛唐の杜甫の文学について、これまで多様な観点から研究が進められてきたことはいままでのない。杜甫研究は杜甫生誕 1300 年（2012 年）を機に一層活性化しているように思われる。しかしながら、杜甫の研究は従来、主に詩を対象としており、散文（賦を含む）の研究はあまり進展していない憾みがある。近年の研究成果を展望すると、韻文の現代語訳や注、さらに韻文を対象とする論考への集中が見て取れる。散文に関する研究も皆無ではないものの、作品に対する論考はごく一部に限られている。また、杜甫の用語の研究においても、対象は韻文に偏り、散文も含めた総括的な解明がなされていない状況がある。

杜甫詩 1400 余首に対して、散文 29 編という数は、詩に匹敵する作品数であるとは言い難い上に、概して難解であるために等閑視されてきたきらいがある。また、杜甫は盛唐の代表詩人として著名であり、李杜と併称される一方、従来、杜甫の散文に対する評価はあまり高くはなかったこともあざかっているであろう。

しかし、杜甫の詩の研究をさらに推進するためには、散文で何をどのように表現しているかを知ることは欠くことのできない観点である。そればかりでなく、杜甫の思索、認識への理解を深め、また表現の工夫や文体への挑戦を含む杜甫文学の全体像を知るためにも、散文の研究は最重要課題であるといえよう。

現在、杜甫の詩と散文との関係を明らかにし、杜甫文学の全体像を解明することが必要であるという問題意識を抱き、まずは賦を除く杜甫の散文に焦点を当てて考えてゆきたい。具体的には、まず杜甫の全散文 29 編を現代日本語に訳すことが端緒となるだろう。その際、現在見ることのできる諸本を対象として校勘作業を行うことが重要である。また、杜甫の用語に関しては、諸注釈を参考にしながら杜甫以前の用例、とりわけ杜甫が大きな影響を受けている『文選』の用語との関わりを意識するとともに、杜詩における用例を丹念に取り上げて、緻密な解釈を行うことも不可欠である。以上のような基盤の上に立って、散文の内容面や文体に関する研究を行うことが必要であろう。杜甫は六朝時代までの散文をどのように継承しているのか、また、中唐の韓愈・柳宗元らの古文復興運動に至る前の時代に、どのような散文をめざしていたのか、について考えてゆくことが重要であろう。

今回のシンポジウムでは、杜甫の散文について、上記のような取り組みを重ねている 3 名のパネリストにより、様々な観点から現在考えていることを報告して頂く。本シンポジウムを、杜甫の散文について改めて問い直し、今後の活発な議論を喚起する契機としたい。